



- 体育会名：関西学院大学体育会アイスホッケー部
- 創部年：1934年(昭和9年)
- 2025年度会員数：43人(4年11人、3年10人、2年11人、1年11人)

- 同窓倶楽部名：関西学院大学体育会アイスホッケー部同窓倶楽部
* 関西学院同窓会 公認団体

- 同窓倶楽部通称：新月会
 - 設立年：—
 - 会員数：—

* 物故者含む

『草創期』アイスホッケー部誕生

関西アイスホッケー界で最古の歴史を持つ関学アイスホッケー部は1934(昭和9)年、スケート部から分離独立して誕生した。当時の部員は沖津景一(初代OB会長)、大石止才男、田中祥皓(第二代OB会長)らがリーダーになって、西岡孝三郎、萩原正巳、栗津義一郎、榎本浩一、首藤幸一郎、藤井憲一郎、植田理、根箭三郎、早川専之助、鄭南翼、入江良平、原守太郎、奥村清之助らを勧誘、部員数も徐々に増えていった。

しかし、この時代、関西でアイスホッケーを始めることは簡単ではなかった。スケートリンクといえばまだ登場し始めたばかりで、とてもアイスホッケー競技ができるようなリンクではなかったし、身に着ける防具など、競技に必要な用具をそろえることの難しさなど、問題が山積みだったのだ。しかし部員の家族や財界の支援でそれらの問題を克服し、まがりなりにもアイスホッケー部が立ちあがった。

36年、ようやく「第12回日本学生氷上競技選手権」(全日本インカレ)に、関西の大学では初めて参加しそれがアイスホッケー部としてのデビュー戦となった。結果は初戦で早大と対戦し、0-15のスコアで敗退したが、関西の大学チームが全国大会に出場するパイオニアとなった。

同じ時代、同志社、京大でもアイスホッケー部が相次いで誕生し、3大学による関西学生リーグ戦も始まった。前述した多くの先輩たちは卒業後もその他の支援者と共にクラブの応援を続け、おかげで学生は戦前戦後の貧しい時代においてもアイスホッケー競技という費用のかかるスポーツを続けることができた。しかし、やがて時代は太平洋戦争に突入し、アイスホッケー

一部員の中からも倉橋哲男、原守太郎の戦没者を出し、また敵国スポーツと目されアイスホッケー競技の灯も徐々に消えていくこととなる。

終戦直後、戦地から除隊し関学に戻った旧アイスホッケー部員たちは、部の再開をめざし、学校、体育会との折衝を重ね、部室と部費の予算も確保することができた。戦争でスケート場もなくなり、防具をそろえるのが難しい中、太田晴夫らが先頭になり六甲山上まで氷を求め、また体力をつけるため山上まで歩き、時間を惜しんで練習に励んだ。そして47年、東京アイスホッケー連盟から大学選手権への参加要請があり、関西から唯一出場を果たした。結果は慶大に1-14のスコアで大敗したが、最後まで堂々と頑張り抜いたのだった。

その時のメンバーは▽FW 佐竹公平、松本定義、太田勇、岩坂亨▽DF 広瀬博、川崎宏、他2人▽GK 太田晴夫だった。

そこから「打倒関東」をめざし、早大OB荒尾正和氏、続いて市川辰三氏を監督に招聘し、53年から60年まで指導を仰いだ結果、関学は52年から64年までの間、関西学生選手権(関西インカレ))8度優勝、関西学生リーグ戦3度優勝、、全日本インカレ3位1度、4位2度の黄金時代を築いた。

全日本インカレでは優勝こそならなかったが54年3位、55年4位、57年は4位になり、関西に関学ありと関東勢に名を知らしめた。この間、特に活躍したメンバーには、菊田陽三(第五代OB会長)、佐藤定行(現総監督)、酒井明彦らがいる。彼らを始めとして、全員が猛者達で、関西では常勝だった。

58年度は光田文彰、水野潤、白川健一、桂巖等の活躍で全日本インカレ準々決勝進出(慶大に4-7で惜敗)、DF桂巖は関西から初めてオリンピック候補選手に選ばれた。59年関西インカレ優勝、60年は中川重孝、村上修、工藤洋士、辻本晃一等の活躍で関西リーグ、関西インカレの2冠を獲得、関関定期戦、同関定期戦でも勝利し、関西での公式戦のすべてを白星で飾った。

61年は関西リーグ、インカレともに宿敵関大に敗れ2位、特にリーグ戦の関大戦で第3ピリオド残り5分まで3-1とリードしながら、残り時間を守りきれば勝てると防御に回ったのが災いし

3—4の大逆転負け。創部以来の部精神である「攻撃は最大の防御なり」の教訓が反省として身に染みた年であった。

62年は歴史的な年になった。市川監督時代に関東との実力差は縮まったかに見えたが、その後は全日本インカレ3回戦止まり。そこで主将の宮田康之助(第6代、第9代OB会長)と現役選手は打倒関東を目指し、早大との定期戦をスタートさせた。第1回は1—13と完敗したが、関西で初めて関東の大学と定期戦を結んだことは関西アイスホッケー界全体にとっても大きな意味があった。その効果か、全日本インカレでは関東5大学の雄、明大に2—3の大接戦の末敗れたが、新聞各社は「東西の実力差接近」と見出しを打ったほどだった。関西インカレでも同志社、関大に圧勝し7度目の優勝。翌64年にも8度目の関西インカレ制覇を果たすが、その後はリーグ戦を含め、85年の関西インカレまで優勝のない時代が続くことになる。

65年、2部リーグ降格。全部員が「伝統」の重みを感じながら、1部復帰のため厳しく長い冬合宿を長野県松原湖で過ごした。69年に1部昇格するも、翌年再び2部降格。78年1部昇格、82年2部降格と昇降を繰り返した。部員達は関学アイスホッケーの伝統を守るべく、低迷の時代をものがき苦しみながら、部活に勉学に「ノーブル・スタボネス」の精神を胸に頑張り抜き、後輩につないでいった。その努力は立派というほかなく、彼等が礎になってこそ、関西最古の80年を超える伝統を誇る関学アイスホッケー部の復活と、その後の飛躍的な発展につながったといえる。そしてついに85年関西インカレ優勝、86年1部リーグ優勝と、アイスホッケー部の夜明けを迎えることとなる。

85年度、2部リーグで全勝優勝し1部リーグに復帰した関学は同年の関西インカレで21年ぶりの優勝を果たした。部員こそ少なかったが幼少時代をカナダで過ごしアイスホッケー経験豊かな大寺正拳の入学と、小泉奈津樹、藤田伸、近藤浩明らがチームをまとめ、久しぶりの関西制覇だった。続いて86年、大寺と藤井正彦、今井康隆、芦沢実、宮崎誠らの活躍で1部リーグ復帰1年目、26年ぶりの優勝を飾った。

87年は大寺正拳・公章兄弟に竹内計人、小竹大輔、竹内干史、向江秀雄、渚凡人等の活躍で30年ぶり2度目の連覇。全日本インカレでも関東の強豪立教大を8—5で破った。88

年も関西リーグ3連覇、関西インカレ優勝の2冠、関西無敵を誇った。当時のアメリカンフットボール部総監督、武田健学長をして「今やアイスホッケー部はアメリカンフットボールを凌ぐ勢いだ」と言わしめたほどだった。

90年代に入ると再び1部リーグ下位に低迷、96年には2部リーグ降格するが、1年で1部リーグに復帰する頑張りを見せた。この頃から関大、同志社、立命館、京産大の関西上位チームに北海道、東北地方出身の経験者が多数入るようになった。関学も佐藤総監督、林監督が北海道合宿の合間に有力高を訪問して勧誘、2002年度には5人が入部した。この年を契機に毎年数人から10人ほどが入学し、13年度には全員が経験者となり、全日本インカレでは55年ぶりにベスト8まで勝ち進んだ。

先輩達が目標にしていた「打倒関東」に近づきつつある一方、関西では関大、同志社、立命館と毎年優勝争いをしながら今一步及ばず、関西制覇からは25年間遠ざかっている。特に関大とは約20年以上関関定期戦、総合関関戦ともに全敗。2022年度に創部90周年を迎えたアイスホッケー部は、ぜひ打倒関大を達成してほしい。上ヶ原キャンパス内に練習場を持たないアイスホッケー部が90年余りの歴史を続けられたのは、ひとえに新月会(OB会)の方々の支援、監督、コーチ陣の指導、その時々先輩の活躍があつてこそ。経験豊富な現役がそろった今、輝かしい伝統を持つ「強い関学」の再興を必ず実現してくれると確信している。